長洲町立長洲小学校　校長便り　№158

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和6年2月22日(木)

【愛語録】「己自信をつくるもの」

「考えは言葉となり、言葉は行動となり、行動は習慣となり、習慣は人格となり、人格は運命となる。」

マーガレット・サッチャー

“鉄の女”と呼ばれた、イギリス初の女性首相の言葉です。日々思考することは人間の常ですが、思考が言葉になり、言葉はその人の品格を育み、ひいてはその人の人生までも左右するということです。逆に考えれば、日々の思考と言動をポジティブに変えることで、人生を充実させることに繋がる、と考えられます。私たちの日々の言動を見つめましょう。マイナス発言や行動、愚痴等は個人の品を下げます。

私の中学校時代　中学生とお金

中学校に進学する時期、いわゆる思春期、子供達は色々なことに興味を持ち始めます。趣味の世界、友達との付き合い、自分だけのために…と、色々な世界に関わっていきます。そしてお金がかかることも予想されます。私達保護者としては、悩ましい問題です。友達とも多くの面で関わりを深めて欲しいけれど、どこまで「良し」とすべきか…。友達と良い関係を保つために必要なお金は渡さなければならないけれど、中学生に見合った金銭教育はしていかないといけない…。今、周りの友達はどれくらいのお小遣いをもらっているのだろう？うちは必要最低限だと思っているけど、それで寂しい思いはしていないだろうか？

中学生時代を思い出してみました。確か私の場合は、中学入学当初、月に幾らかの小遣いをもらっていたと思うのですが、その後色々なことに興味が出てきてからは、その時々で親に援助をしてもらったようです。両親も多少は目をつぶってくれていたようです。うちはこれで何とかなったようですが、今と時代が違います。これから、私達保護者は子供達の精神的な過渡期にあたり、お金の大切さや活用について、考え方を徹底していく時期に入ります。ご家庭では、今年のお年玉の遣い道は如何でしたでしょうか？我が家の場合、親が一括管理します。お年玉はどのようなお金なのかを子供達に話し、そして欲しいものを聞いて、それが必要なものかどうかを自分達で判断させました。子供達なりに「無駄遣いにならないようにしよう。」という気持が伝わってきましたので、OKしました。それを大切そうに子供達が使っています。

少し話が飛躍しますが、驚くべきお話をしましょう。子供達の欲求のままに色々なものを与えているとどうなるか？ある町で放火事件が起きました。一軒家を全焼してしまいます。捜査は短時間で終了、犯人はその家に住む中学2年生だったのです。事情を聴いてみると、放火の理由はこうでした。

「父親にゲーム機を壊された…。」

時間を決めてゲームをしていた。ある日、のめり込んでしまい時間を忘れてゲームをしていた中2の少年。「家がなくなればいい。」と、本気で思ったらしいのです。先を考えず感情に任せて動く青少年たち。何でも買い与え、子供のわがままですべてを許容し甘やかした結果です。ゲームもお金に絡む問題です。看過する訳にはいきません。

シリーズ「自分を語る」#158

校長として着任したものの学校はコロナ禍の影響で休校が続いており、中島小学校の子供達との出会いは2か月後でした。コロナ禍の影響は学校だけでなく多くの場面で影を落としており、年度初めの歓迎会や通常の私的な酒宴も一切ないという、少々異常な時間を過ごすことになりました。保護者の皆様におかれましても同じような状況ではなかったかと拝察します。4月中旬でしたか、緊急事態宣言によって外出もはばかられる日々でしたよね。外食産業等は他愛ない打撃を受けられたことは皆さん周知のとおりです。当時の自分を振り返ると、「家でできること」を真剣に考えた時間でした。私の場合、集中して行ったことが2つあります。1つ目は映画（アニメも含む）を観ることです。タイトルを上げるときりがないのですが、印象に残っているのは「エヴァンゲリヲン」シリーズです。仲間から進められて観たのですが、見始めるとやめられなくなるという心理がよく分かりました。メッセージ性も高く、楽しく観ることのできたアニメでした。2つ目はプラモデル作りです。これについては大人買いしたものもあり、我が家で話題になることはなく、どうかするとケンカのもとになりますので詳細は伏せておきます。

さて、コロナ禍における大きな学びについてお話します。それは、我々の人権感覚の脆さです。コロナウイルス感染は誰にでも起こり得ることですし、現在では感染症区分上第5類にまで引き下げられていますので、危機感も薄れつつあります。しかし、当時はどうだったでしょうか？患者さんが悪者扱いされ、「外出するからいけないんだ。」とか「予防をしないから感染するんだ。」等と、ひどい言われ方をしていた当時を振り返ることができます。そもそも、コロナ禍において我々は何と闘うのかを考えれば、答えは自明なんですよ。ウイルスと闘わなければならないのであり、感染者ではありません。感染者にはその苦しみや辛さに寄り添うことが大切なのです。当時の社会全体の精神的な構造を考えてみました。

冷静に考えると、3つの“感染症”がありましたよね。1つ目は「病気」、2つ目は「不安」、3つ目は「差別」です。第2の「不安」については、ワクチンや薬も無いことや分からないことが多いことによるものです。不安や恐れを感じて振り回されるという症状が出て、気づく力や聴く力、自分を支える力を弱めます。不安によって人を遠ざけることによって第3の感染症「差別」が起こります。3つの感染症は繋がっていて、正に「負のスパイラル」です。このスパイラルの中で敵がすり替わってしまっているのです。本来の敵は「ウイルス」ですが、特定の対象（感染者）を「見える敵」として遠ざけるのです。負のスパイラルの中で、本当の敵を見なくなり、束の間の安心感を得てしまう、それが「差別」なのです。

負のスパイラルを防ぐには、どうすれば良いのか？私はこう思います。自分を見つめ、いつもと違う自分になっていないか考え、安全や健康のために自分に必要なことを見極め、実行してみることです。そして、「確かな情報」を収集し拡め、差別的な言動に同調しないということが大切です。

堅い話になってしまいました。次号は元に戻りますので…。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）